二〇一九年九月二四日（参加者一三名）

竹林の何処ともなく添水打つ　うつぎ
掬はれて馬穴狭しと源五郎　うつぎ
色変へぬ州浜の松の男ぶり　うつぎ
太陽の塔を遥かに鳥渡る　うつぎ
暦日の州浜の松や天高し　菜々
曼珠沙華昼なほ暗き藪の道　菜々
風さやか州浜をまたぐ橋半ば　菜々
薄もみぢ明りに園の径めぐる　はく子
竹林の秀のささゆれて小鳥来る　はく子
秋惜しむ音色を異に作り滝　はく子
百幹に明るき日射す竹の春　わかば
喬木の奈落の小径昼の虫　わかば
泉石の水面へかざす薄紅葉　わかば
モノレール秋の中空行くごとし　たか子
しおからのへの字に不動杭頭　たか子
蝉の殻幹のあんなに高きまで　なおこ
庭園の小径を分かつ竹の春　なおこ
竹春の径ジョギングす部活女子　もとこ
列なして大樹に縋る蝉の殻　もとこ
行厨やもみづる藤の棚の下　こすもす
未草水の舞台に踊るごと　小袖
要なす州浜の松の色変へず　ぽんこ
滝四つ和して高鳴る渓涼し　満天

吟行句会みのる選

二〇一九年九月二四日（参加者一三名）